



昔は一月一日から七日の松の内までを大正月と言うのに対し、十四、十五日を小正月と呼んで様々な正月行事が行なわれていました。現在はあまり馴染みのなくなった小正月の行事を市内の数ヶ所ではまだ見ることが出来ます。

### ◇鳥追い (ワァーホイ)

一月十四日には鳥追いという子供の行事が行なわれていました。田や畑に簡単な小屋を建て、田楽や甘酒を作って子供たちがおこもりをするというものでした。小屋は地域や参加人数によって四方を筵むしろで囲うだけのものや円錐形のものなどがあり、祭りの最後に小屋を焼く地域もあり

ました。

もともとは田畑の害鳥を追い払い、豊作を祈願するという意味合いがあったようです。鳥追いのときに子供たちが叫ぶ言葉から「ワァーホイ」と呼ぶ地域もあります。昔はいたるところで行なわれていましたが、多くの地区で断絶してしまっているのが現状です。

しかし、近年、地域の交流や子供たちへの伝承という目的で復活させている地区があります。

盛金宿二地区では、十四年前から地域の大人が中心となって、鳥追いはじめとするいくつかの年中行事を復活させました。近隣住民の間で次第に薄れていくつながりを寂しく思っていた人々が集まり、伝統行事を続けています。

当日は、朝から鳥追い小屋を作り、コウゾツカラ(皮をはいだ楮の芯)に子供たちが餅を刺してどんど焼きの火にかざして願い事をかけます。ここで使うコウゾツカラを手に入れるため、大子町の楮農家の作業を手伝いました。また、紅白の餅を木の枝に付ける「ハナモチ」や「マユダマ」を作る行事も行なわれます。そのほか芋串や豚汁が振る舞われ、夜遅くまで賑わいを見せます。

山方五区でも七年前から鳥追いの行事が地区をあげて行なわれています。厄年の男性が招待されてハウロギ

(後述)をしたあと、同様な行事に参加し、お振る舞いをうけます。



▲マユダマと芋串 (盛金宿二)

### ◇ハウロギ

同日には、数え年四十二歳の厄年の男性の厄を払う「ハウロギ」と呼ばれる行事が各所で行なわれています。もともと「ハウロギ」とは払い落とすという意味で、厄を払うことを意味しました。

小野地区では現在まで断絶することなく続いていると言われており、鹿島高房神社で厄払いの祈祷を受けた後この行事が行われます。今年は今前厄・本厄・後厄の男性あわせて十人が集まり、このうち本厄の男性二人がハウロギを行ないました。

四尺二寸(約百二十六寸)の晒さらしに百円玉を四十二枚と大豆を四十二粒入れたものを麻紐で結び巾着のよう



▲雨の中でのハウロギ (小野地区)

な形にしたものを厄男が各自で作りました。この物自体も「ハウロギ」と呼ばれます。社殿を三周回る間に股の間からこのハウロギを落とし、頼んでおいた子供に拾ってもらいます。昔から「キンタマハウロギ」とも呼ばれ、「サカリを落とす」意味合いを持っていました。

「初老の祝い」として内祝の品を引くこともありました。

四十二歳で「初老」とは現代の感覚とは大分違いますが、昔はきつい農作業と十分でない栄養状態、医療の不足などもあり、体力の衰えるのも今よりずっと早く、「初老」という実感があったのかもしれない。

(歴史民俗資料館)